

第30回 MASセミナー

「人と空間」

日時：2019/3/23(土)

講演：14:00~16:00

人ともものが相互に働き合って空間を創っているのを見ると、大袈裟かも知れないが永い人類の歴史を想う！「道は人が創り、人は道に沿う」というような相互関係は示唆的で、何時も響き合う音楽のように美しく感じられる。
(司会進行：湯本長伯 4枚×4分)

建築は人が創る

建築は人が創ってきた、そのことは古代エジプト、ギリシャ～飛鳥時代など、時には洋の東西を越えて連綿とつづいてきた。時代をこえて「残存する建築」の意味するのはなにか？そこには『人と建築の純粹で密接な関わり』がまずあった筈だ、その関わり方の深さにより建築は単なる「もの」から「生命力をあたえられた存在」と成ったのではないのか。その時代が求めた精神、権威、機能が既に失われた現代になお残しておきたい意味を考えると、この関係は少し明瞭になるのではないか。



今井 均

建築家は難しい判断を迫られている

人に寄り添うことだけでは、実は建築にならない。そこに読める願望や実行動、生活パターンを読み込んで空間に置き換える必要がある。それらによって暮らしや環境が豊かになるとして、まとめるのが建築家だが、そこには各時点での判断に「主体側に帰依する」か「客体側に立つ」かの二方向性がある。それを職能上の誠意から例えると、芸術家は前者であり易く、科学者は後者に向かう。意識せずともその差は大きく、建築家はその間での難しい立ち位置と判断を常に求められている。



大倉富美雄

人を守る建築環境

世話になった先輩が自宅の浴室でヒートショックで亡くなった。悔しくて仕方がない。浴室での事故を含む家庭内事故死は近年14000人前後で推移しており、これは交通事故の4倍近い数である。これをゼロにできないか。事例はある。わが国は衛生状態の改善で年間3万人以上いた胃腸性の感染症死者をほぼゼロにした実績がある。建築と建築家が人があまねく天寿を全うできる住環境を作ること。人に寄り添う出発点はそこにあるのではないか。



黒木正郎

人々の場を創る

建築を学び始めた当時、建築雑誌の写真は人影の無い美しい器としての建物の姿であった。人が使う空間としての建築と美しい作品としての建築の間で、その在り方を悩み続けた学生生活だったが、卒業制作で辿り着いたパースには大勢の人の姿が描き混まれるものとなった。その時の思いが、後の建築創りに繋がっている。銀座松竹スクエアでは、人々が佇む大階段。二番町ガーデンの屋上では、新しい仕事の場としてオープンエアー・オフィスの提案が成された。



武田有左

人に寄り添う建築とは？

たとえばケルン大聖堂のように、壮大な大きさに打たれる建築がある。一方で民家や町家のように、人に寄り添ったヒューマンな建築の魅力がある。前者も後者も、どちらも大切な建築の役割だ。自分は学生時代、象設計集団の笠原小学校や名護市庁舎に感動し影響を受けたことを思い出した。善き意図を持つ質の高い建築は、長く愛され人に寄り添うかもしれない。そこに生きる人に、喜びや自信、豊かな気持ちを与える建築について考えてみたい。



田口知子

人に寄り添う空間とは？

不思議なことだが、有名建築雑誌で多く「人」のいない写真がある。本来、建築は人を守り人を豊かにするのが目的なのだが、誰のために作るのかを意識することで空間が変わる。住宅でも学校でもひとに寄り添うことで空間は無限に変化する。出発点が高まる。それでは、あなたは誰のことを思い建築をつくるのか。その対象となる人と空間を語る会にしたい。



宮田多津夫

心理的空間と物理的空間

現代の空間論は物理的空間と心理的空間について様々な分野で展開されている。心理学の空間表象研究、環境が人間に影響する研究など興味深いものが多々あろう。空間は人間が知覚したときに、はじめてあらわれる。イメージに自らを投影して、実在の空間を探ることが可能になる。設計は心理的空間を現実化することともいえるが、物理的な空間は人間に多くの影響を知覚させる。この表裏一体の関係を建築家は意識しないとイケない。



村上晶子

空間・場・物語

リビングで夫婦がのんびりお茶を飲んでいるシーンには、建築「空間」と人の関係がある。これはくつろぎの「場」であり、建築家は「場」を設計しているとも言える。共同住宅の設計で、利用者参加のワークショップをして、一緒に必要な部屋を考えたり、塗装したりした時に、出来上がってから「この黒板は私のアイデア！」「ウッドデッキは私が塗装したの！」など思い出話が語られる。つまり建築家は「場」のみならず「物語（ナラティブ）」を設計している。



連健夫